

いの流水俳壇

松尾 満津於選

「当季雑詠」

うたた寝の手より落ちたる団扇かな

大川 節弥

〔評〕この頃夏の季節の句の中に、団扇や蚊帳といったものの季語を使った作品があまり見受けられない。殺虫剤が手軽に使い、クーラーが田舎の隅々まで普及し、団扇を使う機会が少なくなつたので、表現の氣息の中から遠退いたのである。そんな世代ではあるが矢張りこの句のような情景はよく見掛ける。いわれてみれば情景はそっくりそのまま、何と平和な姿ではないか。郷愁は童謡めく。

鳳仙花はじけ未来の開けたる

川村千図子

〔評〕鳳仙花は東南アジア原産で、観賞用に栽培されている。花は白、桃、赤、絞りや八重咲きのものもある。果実は熟すると一寸触れただけではじけ飛ぶ。昔は花を爪紅に用いたところから「つまくれない」「つまべに」とも呼称されている。未来が開けるといふのは少し大袈裟だが、どこ

かで「パット」気持ちの発散がほしいのではなからうか。

味わいぬおふくろの味夏茗荷

筒井 眉躬

〔評〕茗荷の花は秋、子は夏、茗荷竹は春、となつているがこの句は夏茗荷と限定している、その子が地から出てくる花莖である。味わっているその忘れられない夏茗荷の味、そのおふくろは既にもう遠い過去の人になつてしまつているが、なつかしい郷愁であることには変わりない。

七夕やにぎわい見せて橋たもと

弘瀬うき子

〔評〕五節句の一つ。牽牛、織女の二星が年に一回会合するという伝説があつてそれにちなんだ行事が七夕祭である。むかしは随分盛んだつたが、今はだんだん下火となつてしまつている。それにしても渺茫たる初秋の星空を仰いで、誰がそんな壮大なロマンを考えたであろうか。大空の一つ一つの星を綴り合わせて名前をつけ、それぞれに話題を書いた古代先人の想像力には唯々感激する以外に何もものもない。橋は希望と願いを一ぱいにかかえた子どもたちの賑わいに撓む。

眼裏に杖引く句友梅雨の葬

白桃の傷ある甘さすりけり

万緑の奥の院より水はしる

夏潮を蹴りて競ふやめじか船

川岸に広がる暮色合歓の花

エプロンの結び目にある梅雨湿り

青き香の残る茅の輪をくぐりけり

乳兄弟鬚剃つており星祭り

朝日受く川は静かにくちなしの花

洪団扇記憶の風を生みにけり

梅雨籠りブラックコーヒー又注ぐ

諸々の昭和の歴史麦の秋

梅雨晴れ間児の無き庭も傘の華

葉は眠り紅あざやかな合歓の花

新茶汲む夫はメガネをはずしをり

所詮ひとり盛夏の割箸口で裂く

泳ぐ児を見守る母や仁王立

かまきりの首くるりと見話らる

納骨を終え帰り路合歓の花

台風の進路変えたる安堵かな

七夕や逢瀬の川の縄太き

友草 水月

岡本とも子

川上こよね

榊原喜美子

津田 久美

井上 郁子

松岡きよ子

大西 昇月

楠目 哲郎

竹崎 光子

川村 博子

渡辺万利子

中屋 桜子

森岡 照月

中野 好子

間 浩太

伊藤 たみ

吉良 芙美

川村 愛

筒井 文

松尾満津於

次 題 「当季雑詠」五句
締め切り 毎月15日

投句先

吾北教育事務所 上八川甲2010

☎ 867-2133

今月のことも川柳

思いやり 大切だけど 守れない

下八川小2年 宗我部有香

つりをした なまずをつつた おもかつた

下八川小2年 宗我部浩大

ひまわりは 太陽向くよ なんでなの

伊野小3年 中岡 龍也

増えている 子どもの事件 ああいやだ

下八川小3年 甲藤 綾香

さんかんだあたまのうしろ あつくなる

神谷小3年 坂本しおり

夏休み 母の悲鳴が きこえるよ

伊野小5年 吉良あすか

やる気はね いつも自分を ささえる

神谷小5年 西川空海山

負けたってそのくやしさが 勝ちになる

伊野小6年 長野 乃樹

夏の日 脱水症状 気をつけて

伊野小6年 高野 眸

みんなと 夏の暑さ おはなしちゅう

伊野小6年 壬生久実子